

大学図書館界の動き

国立大学図書館協議会発足す

昭和29年に発足した全国国立大学図書館長会議は、国立大学図書館の改善のため、大いに尽くすところがあったが、大学図書館の近代化に対する各方面からの要請の高まりとともに、従来の組織を根本的にあらため、機構を強化する必要にせまられてきた。そこで、昨年いらい、組織強化のための特別委員会が設けられ（委員長 広島大学）、文部省とも事務的折衝の結果、新しい規約のもとに、従来の館長会議を解散して、6月7日創立総会が東京大学で開催された。

協議会の役員は理事20館、監事2館よりなるが、理事の互選によって、会長、副会長（2館）が選出される。理事は各地区から選出されるが、近畿地区選出の理事は阪大、滋賀大に本館の3館である。理事会での互選の結果、本年度の会長は東大、副会長として北大と本館が選ばれた。さらに20館の理事が、10館づつで2つの部会を作り、第1部会は図書館の管理問題、第2部会はそれ以外の問題の処理に当たることになるが、本館は第1部会に所属することになった。

そのほか、各種の特別委員会や調査研究班も置かれることになり、大学図書館の当面する問題に強力に取り組む体制はでき上ったわけで、今後の積極的な活動が期待されている。

国立国会図書館長との懇談会開かる

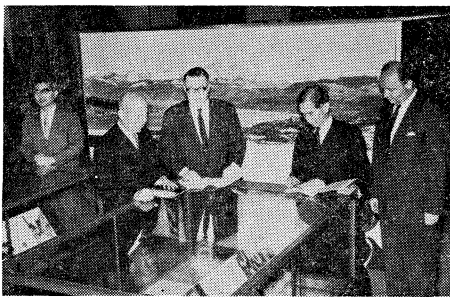
5月25日、河野国立国会図書館長を囲み、関西学院大学を会場として、国公私の大学図書館長との懇談会が開催された。この懇談会が関西地区で持たれたのは一昨年（会場 京都大学）につづいて、2回目であるが、24大学から42名が参加した。

今回の懇談会の議事の一つは、国会図書館で出している印刷カードの利用上の問題で、印刷カードを利用している神戸商大その他より、利用上の問題点および改善を望まれる点の指摘があった。業務量の増加に対処する方策のひとつとして、印刷カードの導入は、本館としても検討を続けている問題である。

1965年に成立したアメリカの高等教育法では、大学図書館の資料源を充実強化するため、議会図書館が世界的規模で、学術資料を収集し、中央目録作業を行なうことを規定している。そのため、議会図書館では、さっそく、National Program for Acquisition and Cataloging (NPAC) の検討を開始した。この種プログラムの日本における実現の可能性が、印刷カードの問題について取り上げられたが、深く討論を進めるまでにはいたらなかった。

展 観

トーマス・マン展



5月8日より22日まで、本館において、ドイツの文豪トーマス・マン(1875-1955)の生涯・環境・作品展が開かれた。写真、遺品、著書、書簡、原稿等261点が展示され、多数の愛好者の観賞を得た。本展は日独文化研究所、京都ゲーテ・インスティトゥートおよび本館の三者共催の下に開かれ、前日の7日にはガリンスキー西独総領事、ケンプ日独文化研究所長、奥田総長を迎えて開会式が行われた。